
ハーベスト忍者（元勇者）

行天店

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハーベスト忍者（元勇者）

【Nコード】

N3427Y

【作者名】

行天店

【あらすじ】

魔王を倒したことで勇者になった主人公は、異世界人で元忍者。そんな最強な主人公の後日談の物語です。

1・自己紹介

ザック、ザック、ザック。

俺は今、黙々と土を耕している。

新しく野菜を植えるための畑を作るためだ。

ザック、ザック、ザック。

今日は早朝からやっている。

ちようど日が昇ってから真上に来ようとしている時間だ。

結構長い間作業をしている。

ザック、ザック、ザック。

周りを見渡せば、すでに東京ドームが丸々収まるぐらい耕していた。

しかし俺は全然疲れていない。

まだまだやれそうだ。

ザック、ザック、ザック。

とにかく無心でクワを持ち上げ、振り落して前に進んでいる。

これまで色々忙しい日々を過ごしていたので、

こついう単純な作業は心が落ち着く。

ザック、ザック、ザック。

あ、自己紹介が遅れました。

俺、元勇者つす。

あと異世界からやってきました。

ザック、ザック、ザック。

ある日天ぷら食べたくなって、
家の裏山で山菜採ってたら、
気づいたら異世界にいた。

ザック、ザック、ザック。

最初は戸惑ったけど、

特に将来の夢も、これといって人生の目標もなかったので、
「まあいっか」の一言でこっちの世界で生活していくことを決めた。

ザック、ザック、ザック。

別に召喚されたわけじゃなくて、

勝手にこっちの世界に迷い込んだらしいので、
最初は近くにあった町で、冒険者になって活動していた。

ザック、ザック、ザック。

昔、元いた世界で熊を素手で仕留めてから、
なんかこう、命のやり取り的なものに嫌悪することもなかったの
で、

割と冒険者という職業は自分に合っていた。

ザック、ザック、ザック。

ああ、ちなみに元の世界では、ニート忍者やってたんだ。
忍者の技はこっちの世界の方が使う機会が多く、役に立ったので、
結構早めに冒険者として成り上がることができた。

ザック、ザック、ザック。

こっちの世界で冒険者として活動してたら、
なぜか知らないうちに割と有名になったらしく、
『疾風の黒装束』『電光の厄災』『風雷神』とか厨二な二つ名が

たくさん付いていた。

ザック、ザック、ザック。

そのうち、近くの国の王様に呼び出され、魔王を倒してこいつで依頼され、

俺を含めて3人の仲間たちと一緒に魔王退治の旅に出た。

ザック、ザック、ザック。

一人はその国の第三王女で、

もう一人はその国一番の魔法使い（男）で、

まあ結構、意見の相違ってやつで喧嘩もしたが、割と仲良く旅をしていた。

ザック、ザック、ザック。

sonで、魔王の住む城に行くまでに寄った他の国で、色々あって、仲間が増えた。

まあそいつらとも結構、意見の相違ってやつで喧嘩もしたが、それなりに仲良く旅をしていた。

ザック、ザック、ザック。

んでんで、魔王城に着いて部下を蹴散らして、途中、拾いものをして、それで魔王にムカついて、

魔王に会うなり、俺が全力で戦ったら、30秒ぐらいで決着が着いた。

ザック、ザック、ザック。

そして、国に帰って、「勇者様」になって、国王から褒美をあげようって話をされて、いろいろ考えて俺が出した答えは……

「ふう、今日はこんなもんだろう」

農作業を終えて、一息ついた俺は、道具を背中に背負った籠に入
れて、家に帰ることにした。

あ、ついでに俺が出した答えは、

「どこでもいいからデツカイ土地をくれ」

だった。

それでももらったのが、人里離れた山奥……というか、山を10個
ぐらいもらった。

王様は太っ腹だった。

まあ、特に特産物もなく、モンスターもちよいちよいいるし、あ
るとしたら生い茂った木々と、綺麗な水ぐらいしかないところだか
ら、簡単にくれたのかもしれない。

ということで、魔王を倒した元勇者様は、今は農夫へとジョブチ
ェンジを果たしていた。

あ、ちなみに俺、やまもりさのすけ山守佐之助。

18歳です。

男です。

2・アイリス

「ただいまー」

俺は木造の一軒家に帰ってきた。
ちなみにこの一軒家は、俺が建てたもので、かなりデカかったりする。

「おかえりなさい！」

家の奥から走ってきて、俺に飛びつくように抱き着いてくる少女。

「ただいま……って痛いって角刺さってるから」

「あわわ、ご、ごめんなさい」

そういつて少女は俺からすぐに離れた。

少女は、見た目12〜4歳ぐらいで、赤色の柔らかそうなセミロングの髪、目はパッチリと開いていて金色にキラキラ輝いている。

顔は均整がとれていて、間違いなく将来美人になるだろう。

スタイルは……まあこれから期待といった感じだ。

特徴をあげるとしたら、やはり綺麗な髪から生やした二本の小さな角だろう。

「ごめんなさい……」

しょぼーん、と顔を床に向ける彼女を見て、俺はその頭に手を乗せて撫でる。

「別に怒ってないよ」

優しく何回も撫でてやる。

「……えへへ」

彼女は照れくさそうに笑う。

俺はその様子を見て微笑んだ。

「さあ、飯にしよう」

「うん！」

そう言って、俺は二人でダイニングに向かった。

木で作ったテーブルには、俺が育てた野菜で作ったサラダとスー
プに肉のステーキが並べられていた。

「お、今日は何を仕留めたんだ？」

肉のステーキを見て俺が聞くと、彼女は胸を張って答えた。

「今日はね。なんと！ブラックベアーを倒したんだよ！」

「おお、それはすごいな！」

ブラックベアーというのは、ここから山ひとつ離れたところに群
生するモンスターで、割と凶暴で、駆け出しの冒険者なら一撃でや
られてしまうぐらいの強さだ。

ちなみにその肉は、焼くとなぜだか肉のうま味を引き出すように

香辛料がきいたものになるので、冒険者時代は見つけたらラッキー
と思つてよく狩つたものだ。

俺は彼女の頭を撫でて、成長を褒めた。

「えへへ。それじゃあ、ごはんよそうね」

「ああ、頼むよ」

そういつて彼女はお櫃に入つたごはんを容器によそう。
俺と彼女はテーブルに隣掛けて座る。
そして日本式に両手を合わせる。

「よし。それじゃあいいただきます」

「いただきます」

二人で昼食を食べ始めた。

「うん。うまいうまい。アイリス、また料理の腕を上げたな」
「ほんと！えへへ。うれしいな」

俺がアイリスと呼んだ少女は満面の笑みでこちらを見る。

「こっちも食べて、はいパパあーん」

「はいはい、あーん」

ちなみに俺はアイリスから「パパ」と呼ばれている。
もちろん金銭的なパパではなく、育てのパパという意味だ。

「うんうん。うまいうまい」

「もつと食べて食べて」

「わかった。わかったから」

そんなやり取りをして、楽しく昼食を済ませた。

「よし、それじゃあ頼むよアイリス」
「はい」

昼食後、二人で野菜を植えている畑の方に来ていた。
とりあえず俺はざっと野菜の状態を見たあと、アイリスに水やりを頼んだ。

返事をしたアイリスは、背中から黒い鳥のような翼を広げた。
そして、俺が作った割とデカいじょうろを持って空を飛んだ。
アイリスはそのまま畑全体に水撒きを始める。

「パパー！見てみて！虹だよー」

じょうろの水で出来た虹を見てアイリスは無邪気に笑っている。

「真面目にやりなさい」
「あはは、はい」

アイリスは笑いながら空を飛びまわった。
そんな彼女の姿を見て、俺は感慨深くなる。

ちよつと昔話。

昔、仲間たちと魔王城に入った時の話だ。
俺と仲間たちは、魔王の間に行くために、その間にいる中ボスたちを蹴散らし蹴散らし進んでいた。

そうこうして、魔王の間に近づいたとき（この時点では魔王の間

が近くにあることを知らない）、俺たちの前に小さな魔族の少女が立ちはだかった。

アイリスだ。その小さな手には小さな刃物があった。

仲間たちは躊躇したが、俺は割と酷い奴なので、真っ先に攻撃を仕掛けた。

俺の忍者刀がアイリスに当たる直前に、俺は持ち前の動体視力？というか観察眼でアイリスの体を見た。

彼女はところどころに痣があり、切り傷や擦り傷のようなものも多くあった。

俺は攻撃を止めた。

アイリスは目をつぶって俺に刃物を突き立てた。

ザクッ

刃物が刺さった俺の腕から血が流れた。

それを見たアイリスは、顔から血の気がなくなり、さらにはボロボロと泣き出してしまった。

冒険者をしていて、しかも回復魔法も使えた俺にとっては、大した傷ではなかった。

しかし、目の前の少女にとってはそうでもなかったらしい。

なんだか目の前で少女に泣かれ、後ろからはジロリと責めるような視線をいくつも受けて気まずかった。

とりあえず、仲間の女性陣がアイリスが泣き止むまで慰め、男たちはその様子を見守った。

アイリスが泣き止み、彼女に回復魔法を掛けつつ、事情を聴くと、なんと彼女は魔王の娘だった。

そこからは、なかなか悲惨な話だった。

彼女は魔王の娘だが、大事に育てられたわけではなかったらしい。

父親である魔王は、彼女をまるで奴隷のように扱い、少しでも失敗があると、暴力を振るった。

時には訳もなく暴力を振るったこともあるそうだ。

この世界の魔族にもDVがあつたのだ。

そして、俺たち一行が城で暴れまわっていることに気づいた魔王は、自分の魔力を安定させて、術を練るための時間稼ぎとして、アイリスを俺たちの前に向かわせたそうだ。

話を聞いて、仲間たちの表情は一層険しいものになった。

女性陣に関しては、怒り心頭といった感じだ。

そして、俺はアイリスの頭を撫でてこう言った。

「よくこれまで頑張ったな。えらいぞ。えらい」

俺の言葉を聞いたアイリスは俺に抱き着き号泣した。

俺は彼女を優しく抱き留め、そして自分の中で魔王に対して氷のように冷たく、爆発しそうになほど真っ赤に燃える感情を確かに感じた。

彼女が泣き止み俺から離れたあと、俺は仲間たちにこう告げた。

「ちょっと魔王の野郎をぶん殴ってくるわ」

そして仲間の制止の声も聞かずに、俺は分身の術を使って、魔王城を駆け巡った。

すぐに魔王の間を見つけ、俺は踏み込んだ。

「よく来たな人間よ！　だが少し遅かったな！　我の力は今まさに最高の——ごべヴあ——！」

俺は魔王の言葉を最後まで聞かずにまずは、ぶん殴った。

「キサマア！！ よくも——ごべろお！！」

ガスガスガスガスガスガスガスガス
分身した俺は魔王を蹴りまくる。

バキバキバキバキバキバキバキバキ
ついでに、魔王を四肢を折りまくる。

ドスザシウドスドスドスザシユザシユ
さらに、魔王を切りつけまくる。

ボスボスボスボスボスボスボスボス……バババババババーン！！！！

おまけに、魔法と火薬の絶妙な調合で作った特製の火薬玉を、魔王の口や刀で切った切り口や尻の穴に入れて爆発させた。

ちなみに、尻の穴に入れる役はその場でじゃんけんして決めて、泣く泣くそれを行った分身の手はしっかりとアルコールで消毒した。

ぐちゅぐちゅぐちゅぐちゅぐちゅぎゅちゅぎゅちゅ

もはや肉塊と化した魔王の肉片もしっかりと踏みつけておいた。

決着は30秒ほどでついた。

あとから急いで駆け付けてきた仲間たちとアイリスだが、魔王の間にいるや否や魔王の肉塊を踏みつけている俺を見てすぐさま、女性陣はアイリスの目を塞ぎにかかり、他の仲間も顔面蒼白、一番気の弱い仲間はその場で吐いていた。

「あ、新たな魔王の誕生だ……」

仲間の一人のその言葉を聞いて、さすがの俺も「やりすぎた。てへっ」とか言った。

まあ名にはともあれ、無事に魔王を倒して、国帰ったあと、俺はアイリスを引き取り（ここですごく揉めたが、最終的にアイリスが俺の傍にすることを希望したので、彼女の意味を尊重した結果となった）、今に至る。

「いやー、懐かしいなー」

もうあれから一年か……、アイリスも随分と元気になった。今ではもう家族も同然の関係になった。

「パパー。終わったよー」

「お、お疲れ。ありがとな」

俺はアイリスの頭を撫でる。

「えへへ」

アイリスは嬉しそうにする。

「それじゃ、帰るか」

「うん！」

俺たちはそうして帰宅した。

「パパ。お風呂わいたよ」

「ああ、よしはいるか」
「うん」

風呂には二人で入る。

裏山に露天風呂も作ったのだが、割と行くのが面倒なので、気分がのった時以外は自宅の風呂に入っている。

「さて、そろそろ寝るか」
「はい」

俺とアイリスは同じベットの中に入って寝た。
俺たちの日常は大体こんな感じだ。

3・一周年記念

ザック、ザック、ザック、ザック、ザック……………

ザクザクザクザクザクザクザクザクザクザクザクザク！！
ザクザクザクザクザクザクザクザクザクザクザク！！
ザクザクザクザクザクザクザクザクザクザクザク！！
ザクザクザクザクザクザクザクザクザクザクザク！！

「ふー、こんなもんだろ」

俺は新しい畑をついに耕し終えた。

最後の方はいい加減飽きてしまったので、分身の術と身体強化の魔法を使ってズルをしてしまったが。

「よし。あとは苗を植えるだけだな」

そういつて俺は何種類かの野菜の苗を取り出す。

「えーと。確かこうやって、あーやって、そんでもってこうして」

俺の手の中で、淡い緑色の光と青色の光が混じり合うようにつながる。

「『増殖』発動！」

俺がそう唱えると、野菜の苗は一瞬にして何百個の量に増えた。
俺が今唱えたのは魔法で、この世界では、まず自分で使いたい魔

法の傾向にあつた属性の魔力を練ってから、魔法名を唱えると発動する。

ちなみに俺が今唱えた『増殖』の魔法は二種類の属性を混ぜるだけだが、練る魔力の調整が大変難しいらしいので、使えるものは少ない。

増殖させた苗を種類ごとに分けた後、俺は再び分身の術を使って一気に苗を植え始めた。

そして終了。

速すぎるって？

だって苗を植える描写なんてつまんだろ。

「さて、あとはまたアイリスに水を撒いてもらうかな」

自分で撒いてもいいのだが、均等に水をあげるのはアイリスの飛行訓練にもなるのであえてしない。

そして俺はアイリスを呼ぶために自宅に帰ることにした。

「ただいまー」

「おかえりー！」

また家の奥からアイリスが走って抱き着いてきた。

今日は昨日の失敗もあつてか、角が当たらないように抱き着いている。

「アイリス。後でいいから新しい畑に水を撒いてくれるか？」

「うんいいよ！」

実に素直でいい子に成長したものだ。

まあ不満の一つも言わないのが逆に心配なのだが。

「そういえば、アイリス」

「なにパパ？」

「アイリスは何か欲しいものはあるか？」

「なんで？」

アイリスは不思議そうに首を傾げる。

「そろそろアイリスと出会ってから一年経つし、記念に何かプレゼントしようと思うんだけど」

俺がそういうと、アイリスは目をいつも以上にキラキラさせる。

「ほんと！？」

「ああ、なんでも欲しいのいってーらん」

そういうと、アイリスはニコツと笑う。

「ありがとう！パパ大好き！」

「ははは」

「えーとね。ん〜じゃあねえ、う〜ん」

必死に悩んでいる様子も可愛らしい。

「あっそうだ！」

何か思い立ったらしい。

「パパとの赤ちゃんがほしい！」

……………どこで教育を間違ったのだろうか。

「えーと、それはまだアイリスには早いんじゃないかな？ いろんな意味で」

「えーなんでもいいんじゃないの？」

上目使いに俺を見上げてくるアイリス。
そんな目で見られても困るんだが。

「だいたいアイリスは子供の作り方なんて知らないだろ？」

俺がそう聞くとアイリスは首を振る。

「知ってるよ」

「マジで!？」

「ラグナのおじちゃんが教えてくれたの」

オーケイ。

これはもう、あれだね。うん。戦争だ。

散々俺がアイリスを引き取るのに反対した俺の仲間の一人ラグナ。
融通のきかない頑固でクソ真面目なやつだと思っていたのに、と
んだロリコン野郎だった。

人の娘に性の知識を植え付けるとか、神が許しても俺は殺すよマジで。

「ラグナのおじちゃんがパパにこういうことされたら、すぐに言い
に来なさいって教えてくれて、『なんで?』って聞いたら、それが
赤ちゃんを作ることだからって言ってたの」

ははははは。

よしパパがんばっちゃうぞ。

あのロリコン殺すの。

ってか、何、俺ってそんなに信用なかったの？苦楽を共にした仲間じゃなかったの？

そりゃ多少俺もやりすぎちゃう時もあるけど、そこまで鬼畜じゃないよ。

「とりあえずそれはまた今度にして、別に欲しいものはないの？」
「えー」

不満ありげにアイリスが頬を膨らます。
まともにここまで不満な表情を出してくれたことにうれしさがこみ上げるが、なんかこう釈然としないぜ！

「頼むよ。パパからのお願い」
「うん。パパがそういうならいいよ」

ニコッ

本当に可愛く育ってくれた。

「じゃあ新しいお洋服がほしい」
「ん？そんなのでいいのか？」

さっきのお願いに比べると格段に難しさが下がったように感じるが。

「うん！」
「よし、じゃあ明日町にでも出かけてみるか」
「わーい！やったー！」

そう言うてはしやぎ始めるアイリスをうれしく思い、つい暖かい
眼差しを送ってしまう。

そして、ラグナをどう煮るかを頭の隅で考えるのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3427y/>

ハーベスト忍者（元勇者）

2011年11月8日10時14分発行